豆乳女と栄養ドリンク男

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
豆乳女と栄養ドリンク男

【Ｎコード】
Ｎ９５５４Ｘ

【作者名】
シュウ

【あらすじ】
豆乳が好きな女と栄養ドリンクが好きな男の話です　。
豆乳はからだに良い。
栄養ドリンクはからだに良い。
つまりこの物語はからだに良い。
どんな理屈かはわかりませんが豆乳も栄養ドリンク　もからだに良いはず。
そう信じてやまない二人の物語。
どうぞご覧あれ。

豆乳女・高倉真琴のプロローグ（前書き）

主人公女・高倉真琴の話です。

豆乳女・高倉真琴のプロローグ

豆乳はからだに良い。
だって大豆イソフラボンが入ってて女性ホルモンが増えるらしい。
それによって乳ガンとかの予防になるらしい。
とにかく豆乳はからだに良い。
私は豆乳が大好きだ。

私が豆乳を飲むようになったのには色々と理由がある。
それをちょっとお話させてください。

あれは私がまだ小さかった頃、学校の友達に胸が小さいことをバカにされた。
思い返してみると、まだ一桁年齢の時期に胸がどうのとバカにされても困る。だって成長期前だったんだもん。
それでも私は、幼心なりにかなり悩んでいた。それはもう図書室で調べたり、お母さんに聞いたり、近所のお姉さんを訪ねたりした。
そういえばお父さんには、

「これは女の子の問題なの！男の人は来ないで！」
「母さーん！ついに真琴（まこと）が反抗期だよー！」
「お父さんには関係ないことよ。むしろ関わってはいけません」

って、お母さんに泣きついてたなぁ。
お父さん、ごめんね。

巨乳化計画を開始した翌日、

『牛乳には胸を大きくする力がある。』

とお母さんが言っていたので、早速牛乳を飲んだ。
しかし、私は牛乳を飲むとお腹を下すタイプの人間だったみたいで、牛乳デビューは巨乳化計画を台無しにした上に、牛乳嫌いという素晴らしい称号を与えてくれた。牛乳のバカヤロー。

だがしかし。私はあきらめなかった。

馬鹿にされたからという理由は多分忘れていたと思う。
ここまできたら意地でも牛乳を飲んでやる。

・・・そう。私は馬鹿だった。
可愛い幼心にはもはや巨乳化計画などなく、牛乳のことしか頭になかった。
ここから巨乳化計画は牛乳克服計画へと移り変わる。
まず考えたのは牛乳がダメならヨーグルトだ。
次の日、お母さんにお願いして買い物について行った。
素直にお願いしてもお母さんには断られると思った私は、カートの上にあるカゴの中にヨーグルトを内緒で入れようとした。
しかし私の身長ではまだカゴには届かない。
その時、お母さんは何も言わずにカゴの中に、私の持っていたヨーグルトを入れてくれた。

家に帰ると早速ヨーグルトを食べようとしたら、お母さんに

「ご飯前に食べると胸が縮むよ？」
「！？」

私はおとなしく座っていました。

そして待ちに待った食後。
冷蔵庫の一番下の野菜室の中からヨーグルトを出した。
お母さんが取りやすいようにって野菜室に入れてくれたのはいい思い出だ。
そして行儀良く椅子の上に正座して食べた。
ほどよく冷えていて美味しかった。
特に何か変化があるわけもなく、いつものように家族三人で川の字で寝た。

午前5時半。起床。
隣で寝ていたお父さんを叩き起して冷蔵庫から牛乳を飲む。
もちろん変わっていない。ただお腹が痛くなるだけだった。

「なぜだ・・・」

幼い私は、『ヨーグルトを食べる＝牛乳と同じ効果が現れる＝牛乳を克服！！』という方程式が出来ていた。
つまりヨーグルトを食べると牛乳が飲めるようになると勘違いしていたのだ。
さすが幼き頃の私！バカ！
ショックを受けた私はお腹が痛いのを理由に学校を休んだ。
その日はお腹が痛いため寝るに寝付けず、テレビばかり見ていた。
朝の情報番組にはじまり、名作アニメ劇場、通販番組、お昼の経済ニュース。
すごいつまらなかった。

そして今の私を作ったお昼のワイドショーの時間が来た。
何気なく、椅子に座ったお母さんとテレビを見ていた私。

『今日の特集は女性ホルモンについてです』

そのとき私は近所のお姉さんの話を思い出した。

「たしかお姉さんはじょせいホルモンが足りないから胸が小さいって言ってた」

その特集の中では女性ホルモンについて事細かに語っていた。
もちろん幼い私にはわかるわけもなく、奥様向けの特集は終わった。
しかしその時の私は紹介されたひとつの食品に興味を示していた。

「お母さん！とうにゅうってなに？あの白いやつ牛乳？」
「牛乳じゃないけど豆のお乳って感じね」
「豆も生きてるのか！」
「飲んでみる？」
「うん！」

その後買い物に行った私とお母さんは、豆乳と夜ごはんの材料を買って帰った。
夜ご飯を食べた私は昨日と同じようにヨーグルトを食べて寝た。

翌朝5時。起床。
隣で寝ていたお父さんを叩き起し冷蔵庫から豆乳を出してもらった。
目をこすりながらお母さんも起きてきた。お父さんがケータイのカメラを向けていたからピースした。
そして豆乳を飲む。意外とうまい。
学校へ行く。なんで休んだかみんなに聞かれる。
帰ってくる。お母さんに聞かれる。

「どうだった？」

「お腹痛くない！」

しかし牛乳を飲むとお腹が痛くなるのは治っておらず、その日から『打倒牛乳！』を目指して豆乳を飲み続けたら、豆乳が手放せなくなるぐらい好きになっていた。

その日から私は豆乳が好きだ。

豆乳女・高倉真琴のプロローグ（後書き）

長い文章を読んでいただきありがとうございます。
なんやかんやで不定期更新ですが、早め早めに書いていきます。
感想とかあれば書いていただけると執筆意欲が高まります。
これからもよろしくお願いします。

栄養ドリンク男・佐々木和のプロローグ（前書き）

主人公男・佐々木和の話です。

栄養ドリンク男・佐々木和のプロローグ

栄養ドリンクはからだに良い。
だってあんなに滋養強壮とか疲労回復とかしてくれるんだ。
からだに悪いはずがない。
だから俺は栄養ドリンクが好きだ。

俺が栄養ドリンクを飲み始めたのには色々ある。
語ってもいいか？
まぁ答えは聞いてないけど。

あれはまだ俺が小さかった頃の話だ。
確か中学生ぐらいの頃だ。

あの頃はやんちゃだった。
授業前にジュースを買ってきて授業中に隠れて飲んだり、勉強道具を机の中に入れっぱなしにして帰ったりもした。
授業のノートには謎の英語が書かれていたり、謎のマークが書かれていた。
ノート提出の時に消すのを忘れて先生から『佐々木くんは絵が上手ですね』とコメントがあったりもした。
俺は茶髪にしたりとか、学校をサボったりという低レベルでナンセンスなことはしなかった。
俺が世界の中心。俺が世界を回しているんだ。
きっと明日になれば宝くじが当たるよりもすごいことが俺の身に降りかかってくるだろう。
常にそんな気がしていた。

・・・あの頃の俺はバカだった。

あの頃、掃除当番で机を動かしてた時に、不良組のやつの机の中身を落としてしまってビクビクしながら片付けたのはいい思い出だ。

そんなこんなでちょっとやんちゃ（笑）だった頃、俺はからだが弱かった。

別に持病を持っていたとか心臓に負担を抱えていた訳ではなく、ただ単に病気になりやすかっただけだ。

あの頃の俺にとっては、

「世界が俺に課した試練なんだ」

とかなんとか思っていたに違いない。

常に制服の内ポケットには何かの薬が入っていた。

偏頭痛持ち、時々くる腹痛、ちょっとした微熱。

全てが魅力的な症状だった。

そんなある日。

学校帰りに、前を歩いていたサラリーマンっぽい男の人が、ビニール袋いっぱいに栄養ドリンクを入れてオレンジ色の看板のコンビニから出てきた。

「そういえば栄養ドリンクってどうなのかな？」

健全でやんちゃな俺は栄養ドリンクは大人の飲み物だと思っていた。

あれは大人が飲むものだ。だから今の俺にはまだ早い。

そう言い聞かせながらコンビニに入り、栄養ドリンクコーナーの前でいろいろ見ていた。

一本３０００円するのもあった。

「なんだこれ。めっちゃ高いし」

中学生にとっては３０００円は大金である。その頃の俺も例外ではない。

母親から毎月もらう５０００円のお小遣いをやりくりしながら友だちと遊んだりしていた。

「ん？」

そこでふと目に止まった商品。

『エナジードリンク・イエローブル』

青い缶に黄色い文字で陳列されていた。

値段はなんと２００円。

「破格じゃないか！これをたくさん買ってこのコンビニを潰してやろう」

そんなことを思いつつ、イエローブルを3本も買ってコンビニを後にした。

家に帰るなり、部屋に入り飲んだ。

意外と美味しかった。その勢いで3本とも飲み干した。ほぼ一気飲みだった。

「なんか疲れが取れた気がする」

プラシーボ効果とは恐ろしいものである。

そんなにすぐに効果があったら商売上がったり下がったりだ。

疲れが完全にとれた俺は、上機嫌で家族と夜ごはんを食べた。
異変が起きたのはそのあとだった。
寝る前にトイレに行きたくなった俺は布団から出てトイレへ行った。
誰だって我慢しておねしょはしたくない。
トイレで用を足していた俺は放出されていく液体を見た。

「う、うわぁ！！」

液体が黄色すぎたのだ。それも尋常じゃないくらいに。
若干濃い黄色になるくらいならたまにあったが、ここまでの黄色は初めてだった。
トイレからなんとか生還した俺は、布団にうずくまり少し震えながら寝た。

翌日。土曜日のため学校は休みだった。
昨日のトイレでの一件が怖くて家のパソコンで調べてみた。
もしかしたら何かの病気かもしれない。
『尿　黄色』で検索した。
しかし検索しても検索しても『腎臓の病気』や『肝臓の病気』といったようなものばかり。
だんだんと怖くなってきた俺は、一日中布団の中で丸まっていた。
夜になって母親が心配して様子を身に来た。
しかし尿の話など母親には恥ずかしくてできない。

「大丈夫？」
「なんでもない！！」

ほぼ半泣き状態で母親に返事した。
母親は何事かと思ったらしく、部屋を出ていった。
少しすると仕事から帰ってきた父親が部屋に来た。

布団の横に座った父親は

「なんかあったのか？友達にいじめられたのか？」

普段の明るすぎて気持ち悪い父親からは考えられないような声だった。

「俺・・・死ぬんだ・・・」

びっくりした父親は理由を聞いてきた。

泣きながら話した。

イエローブルの話。トイレの話。病気の話。いつも持ち歩いている薬の話。

いつも薬を持ち歩いているのを知っていた父親は、俺の肩に手を置いて話し始めた。

「いいか和（かず）。薬のことはいつも言ってるけど飲みすぎはからだに毒だから控えろ。そしてイエローブルはエナジードリンクって言ってからだを元気にしてくれる飲み物なんだ。だからからだに悪いはずがない」

「でもトイレで・・・」

「あれはエナジードリンクが、からだの中から疲れを出しているんだ。ようは副作用なんだ」

「副作用？」

「そうだ。和も薬を飲んだら眠くなるだろ？あれと一緒だ」

「眠くなるのは授業がつまらないから・・・」

「そんなバカな。薬を飲まない時の授業はとても面白いはずだ。和は授業の面白さをまだ見つけ出せてないんだ。もう少し頑張ってみろ」

そうだったのか。副作用か。だからテストの点数が悪かったのか。

「あと一つ。薬よりもイエローブルのほうがからだに良いぞ」

「！？」

「薬は悪いところを直すだろ？だからマイナスを０に戻すだけなんだ。でもイエローブルはどうだ」

「どうなの？」

「わからないか？０の状態でもからだに元気がみなぎってくるんだ。つまり０の状態からプラスにしてくれるんだ」

その頃の俺には衝撃だった。

そして俺はこの日から薬をやめた。

かわりに毎朝一本イエローブルを飲んだ。

いくらイエローブルでも飲みすぎはからだに毒だと言われたので、一日毎朝一本だけを守った。

そして現在も毎朝の栄養ドリンクは欠かせない。

あの日から俺は病気知らずだ。病院とか何年も行っていない。

今はもう２４歳なので普通の栄養ドリンクも飲んでいる。

一番調子を保てるドリンクを探している。

そんなわけで俺は栄養ドリンクが好きだ。

栄養ドリンク男・佐々木和のプロローグ（後書き）

ここまで読んでいただいてありがとうございます。
次は豆乳女です。

こんな感じで交互にそれぞれの視点で書いていきます。
よろしければ今後もお付き合いください。

豆乳女・高倉真琴の生活（前書き）

豆乳女の友達登場

豆乳女・高倉真琴の生活

私、高倉真琴（たかくらまこと）２５歳は豆乳好きである。
健康のためにとかで豆乳を飲んでいる訳ではなく、ただ単に豆乳が好きだから飲んでいる。
現在、街の中心部にある書店で社員として働いている。

「はぁ・・・売上落ちてきてるって言われてもねー」

お昼休憩の休憩室で、パックの豆乳をくわえながら、同僚の山田佳子（やまだよしこ）と話していた。

「でもまこちゃんのとこは一般書籍だからいいじゃん。うちなんか漫画だよ？このご時世何がヒットするか何かわからないって」
「でも得意分野なんでしょ？」
「まぁね。かなり勉強したし」

佳子とはここの書店に勤め始めてからの仲だ。
昔の彼女を知らないけど、簡単に紹介するなら彼女はオタクだ。
前からと言うわけでもなく、この書店に務めて漫画担当を与えられた時から勉強をしたらしい。
漫画担当として、漫画に関する知識を得なければ働いていけないということで、いろいろな作品を見たらしい。
とはいえども、そんじょそこらのガッツリしたお店ではなく、一般書籍のお共に漫画も置いてるような書店なので、深い知識は必要ないんだけど・・・

「そういえばこの間のアニメ見た？」
「え？どれ？」

「だから何回も見てって言ってたやつ。シスコン高校生が国を相手に仮面かぶって戦ったりするやつ！」

なぜか向こうの世界に引きずり込まれたみたいで、私を向こうの世界に引きずり込もうとしている。

「いや、私は見ないってば」

「このわからずやが！」

私の目をのぞき込んでくる佳子。

「アニメを見るんだ！！」

「見ません」

「うわー。これで反応しないとかホントに見てないんだね」

「なんで嘘つかなきゃならんの」

どんだけのめり込んでるんだ。

一つ目の豆乳を飲み終わったので、二つ目を開ける。

「あーあ。私にもナイトメアに乗った王子様が現れないかなぁ」

「悪夢に乗ってくるの？」

「もういいよ！」

アハハと互いに笑いあった。

私と佳子は仲が良い。

プライベートでもよく遊びに行ったりもする仲だ。

人見知りな私は、書店勤めが始まった当初、あまり職場に馴染めずにいた。

お昼休憩も休憩室を使わずに外で食べていた。

3日ぐらい経ったある日、いつものようにお昼休憩で外に出ようとしていた時だった。

「あ！いたいた。高倉さん」
「えーと・・・山田さんでしたっけ？」
「私たち同期だよ？同い年だよ？もっとフレンドリーにいこうよ！」
「え？同い年？」
「うわー。忘れてるし。私ショックだわー」
「なんかごめんなさい」
「別にいいよ。なんか食べに行くの？」
「うどんとか食べに行こうかなーって思って」
「うどん！？なんて色気のないやつ」
「色気！？」
「よしわかった。ラーメンに行こう！」
「ラーメンも色気ないけどねー」
「細かいことは気にしない」

その時から私と佳子の関係は始まった。
彼女は明るくて気さくなかわいい子だった。
私の場合顔見知りとは言っても最初に話かけるのが苦手なだけで、対人恐怖症とかではない。
私が豆乳を飲んでいても全然気にしてない。

「豆乳好きなの？」
「うん」
「私と豆乳ならどっちが好き？」
「豆乳」
「即答かよ」

こんな感じでよく話している。

私にとっては豆乳より好きなものなんてない。
2番目に佳子。3番目に本。みたいな順位だ。

「そういえばまこちゃん、今日このあと空いてる？」

佳子が私に予定を聞いてくるということは・・・

「空いてるけど、荷物持ちは嫌だよ？」
「今日は一緒についてきてほしいだけだって。何も荷物は持たせないからさ」
「ラーメンおごってくれるんでしょ？」
「もちろん！」
「ならば行ってやらんこともない」
「ありがたき幸せ！」

今日は佳子の好きなアニメの何かが発売する日なのだ。
それ関連の日が近づいてくると私の予定を聞いてくる。
しかもきまってラーメンをおごってくれる。
そこのラーメンが美味しいんだわ。
豆乳ラーメンっていって、豆乳スープの中にラーメンが入ってるんだけど、佳子に連れてってもらってからは病みつきになってしまっている。

「じゃあ終わったらいつものところで待ち合わせね」
「イエスマイロード！」
「・・・え？」

豆乳女・高倉真琴の生活（後書き）

ここまで読んでいただき嬉しい限りです。
ここから本編スタートとなります。
これからもお付き合いください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9554x/

豆乳女と栄養ドリンク男

2011年10月28日16時04分発行